



01. 歴史

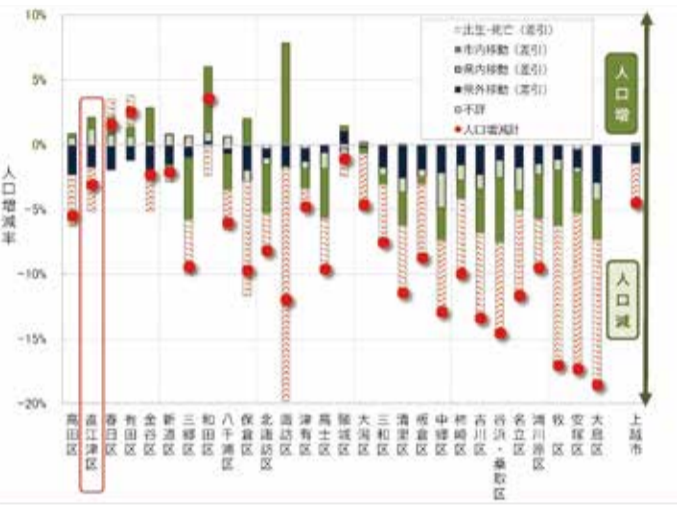
直江津は新潟県南西部を流れる一級河川、「関川」の河口に位置する港町である。北前船の寄港として発展し、奈良時代には越後国府と国分寺が置かれるなど一時は行政の中心として発展した。以後は上杉謙信の居城「春日山城」や江戸時代の高田藩の港として上越地域を支えた。



▲大正時代の直江津遊覧案内 ※1

02. 現状

人工減少、市街地の空洞化が顕著である。能登半島地震による津波の被害は記憶に新しく、この直江津の海岸でも、海水浴場の被害や、住宅地すれすれの高さまでの水位上昇など、その脅威を十分に感じた。対象敷地周辺は海抜が低く浸水が想定される。津波に対する防災と、町の魅力の再興、二つの視点から構想を探る必要があった。



失われた今湊「直江津」

01. 海と人



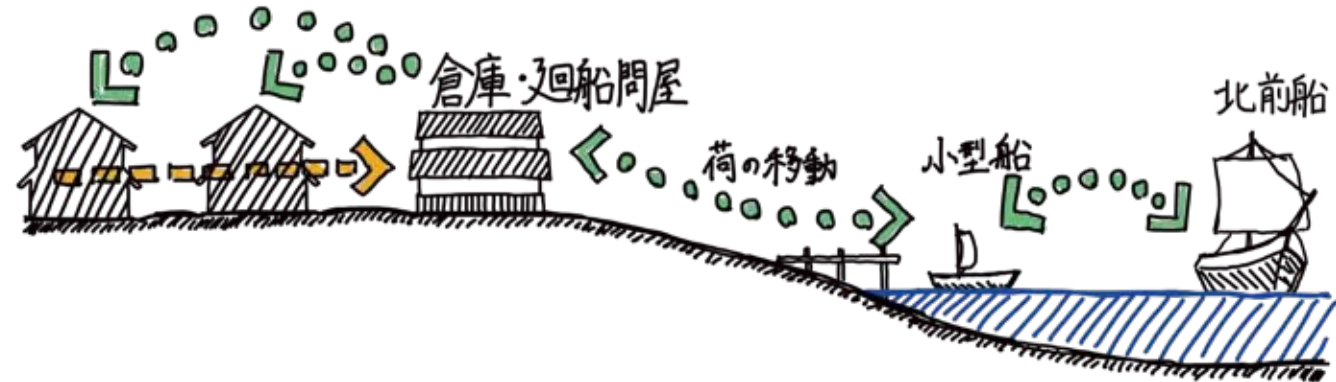
▲かつての海上信仰の様子 ※4



▲閑散とした海辺

北前船に育まれた海と共にある生活

かつての直江津の暮らしは、北前船による交易が中心となり、港町としての暮らしが町全体で行われていた。沖に停泊する北前船、砂浜から小型船を渡して荷揚げし、品々と文化が内陸に広がっていく。暮らしは海上から陸まで繋がっていた。



時代とともに海から顔を背けた生活

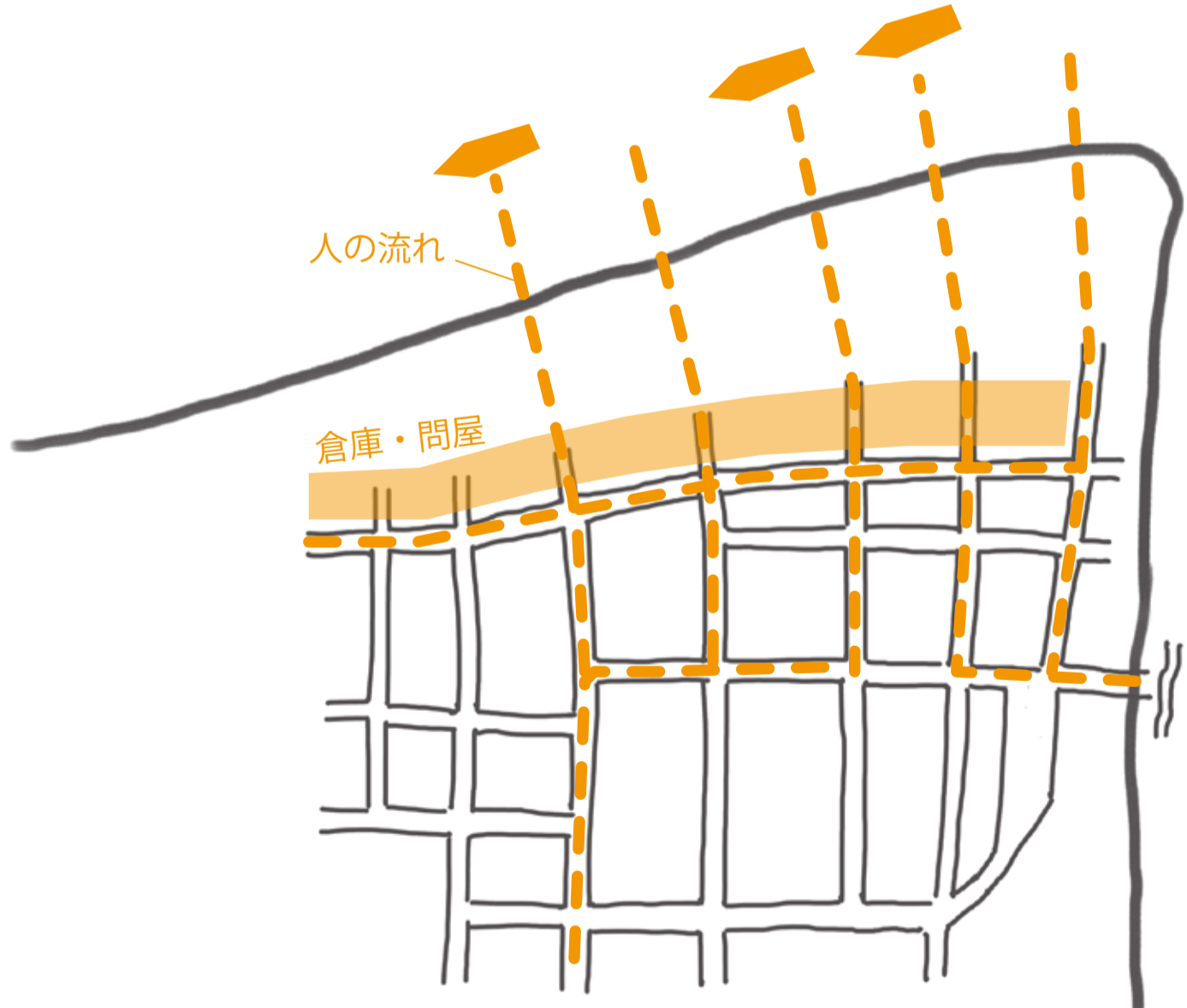
現在の直江津においては、海に関わる生業は消失し、かつて栄えた浜は閑散としている。社会の移り変わりの中で生業が変わることは致し方ないが、遊泳もできない今の海辺のあり様は時代以前の問題である。



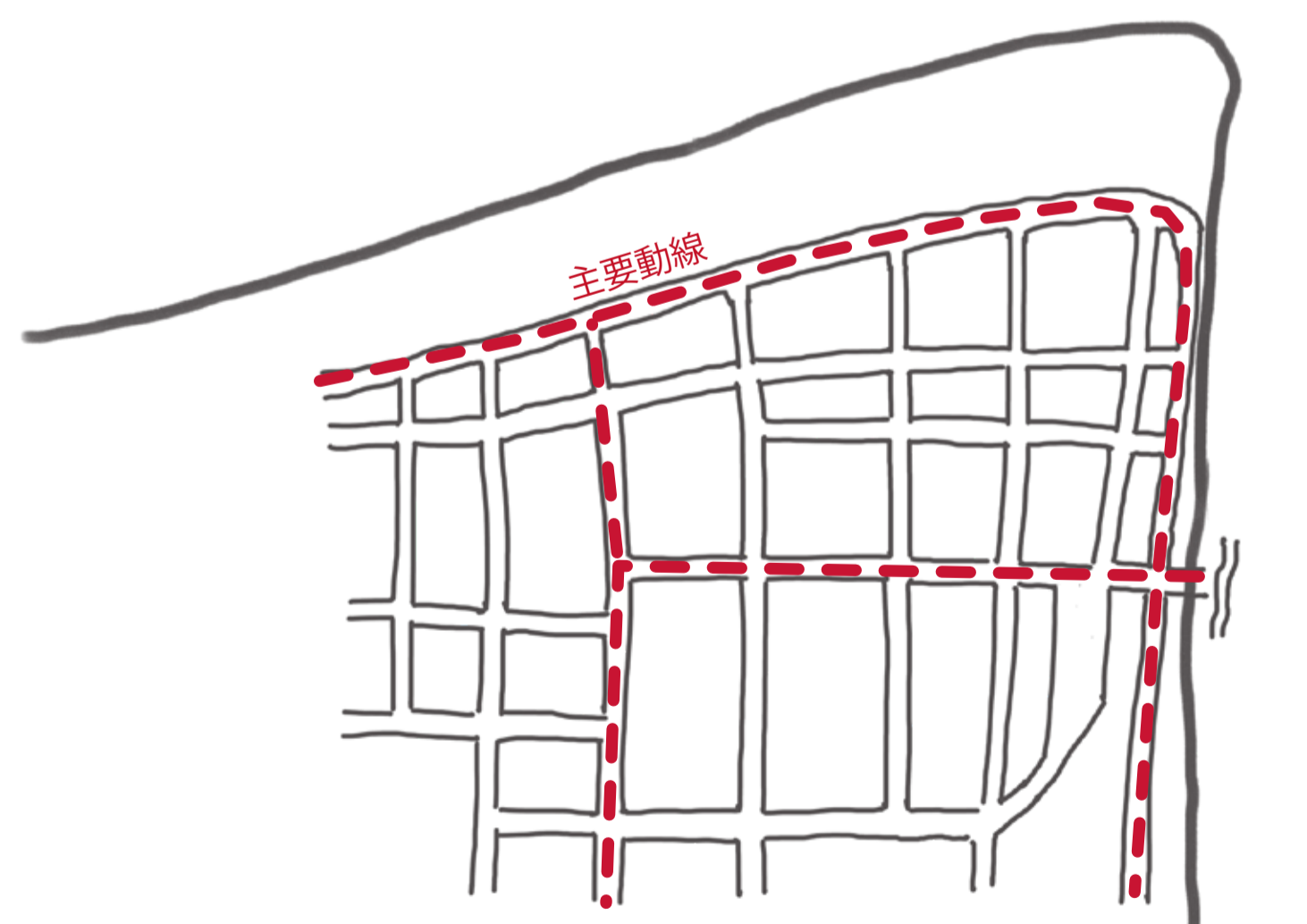
▲海と町を分ける前面道路

▲人気のない砂浜

02. 海と町



まだ対象地が港として機能していた頃の町は、倉庫や廻船問屋、海に垂直な動線が際立ち、町は海に対する正面性を持っていた。また、砂浜が港そのものであったことから、前面の土地利用が、そのまま砂浜へと延長し、町の生業がはみ出ていく形が出来上がっていたことで、港町としての景観をつくりあげていた。



現在の対象地周辺は、港としての機能を失ったこと、主要交通が自動車、電車に変わったことで、町の作りも大きく変化した。町の動線は橋と駅を繋ぐ道が新たな主要動線となり、かつて砂浜と一体だった海岸は海に並行な車両動線へと変わった。また、護岸整備が危険で近づけない海をつくった。